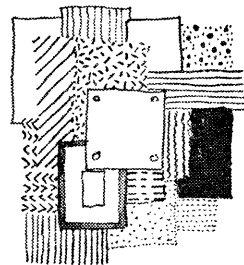


## 第十九回 お店屋さんごっこ

堀内 守



### 交換と交歓

小学校の二年生になると、算数の授業で「お店屋さんごっこ」をやる。グループに分かれて、それぞれが文房具屋さん、お菓子屋さん、魚屋さん、八百屋さんといったぐあいに商品を並べる。紙製品が主になる。花屋さんなどが、かわいらしい花を並べることもある。

近ごろは、世情を反映してか、お店の様子も変わってきた。「お店屋さんごっこ」に登場する商品にマイコンが現われたり、マンガ専門の本屋さんが登場したりする。

店の業態は変わっても、小学生のことだから、「客」を呼ぶやり方は昔とさして変わらない。

「いらっしやい、さあ、いらっしやい」

「お安くしときますよ」

などと呼びかける。

約五十分間の授業のうちに現出するもろもろのシーンはすべて「交換」を中心にした人間の動きである。

これを見ていると、「交換」は「交歓」に通じていることがよくわかってくる。

シカツメらしい人はこれを見てマユをヒソめるらし

い。「こんなにわいわい遊んでいるだけで、きちんとした授業になっていない」というわけである。

さて、はたしてそうなのか。その辺から考えよう。小学校二年の算数——という「教科」の中に押し込めたのではもったいない。ずっと以前からの蓄積がこんなににぎやかな上演となって現われてくるのだという見通しを立てる方がゆたかになる。

### 「ごっこ」の様相

「ごっこ」の登場は早い。動くものを目で追い、イメージと戯れることは想像される以上に早い時期に出現する。その素型を求めていくと、どこまで行っても明確なスタートラインを決めることはできそうにもない。とにかく漠然としているからである。

そこで、私たちの直接の経験を頼りにしよう。

入園数日目の四歳児を手がかりにしてみることにする。この場合の「ごっこ」の姿は、みずから進んで遊ぶというよりは、幼稚園の中にしつらえられてあるままご

とコーナーが子どもを誘う。しかし自分で勝手に近づかない。教師の方を見、暗黙のうちに「あちらへ行ってもいいのかな」という表情を見せる。

こんなとき、そばにいてくれる教師が肯定のことはを発すると、子どもの動きはおだやかになる。近づく。お皿やスプーンなどを眺めたあと、ふたたび教師の方を向いて「さわってもいいのかな」という表情を見せる。

これをことばに出して言えず、もじもじしているところが見のがし得ないところである。

「さわってもいいよ」と教師が認めてやると、はじめは珍らしげにさわり出す。そしてお皿やスプーンを並べはじめる。

こんな場面はあまりにも当たり前の場面だから、ふつうは人の関心の対象ともならないくらいである。いずれも、のりこえていくべき小さな場面だと見なされているからだ。ところが、この小さなシーンを少していねいに検討してみると、そこには小さいながら、まことに意味のある筋立てが看取れるのである。この点を念頭にお

いてもういちどこの場面を見直してみることにしよう。

かわりとして

もし、この小さな場面を入園したばかりの園児とのかかりとしてとらえ直してみたらどうなるだろう。

ご本人の園児は、恐る恐るままごとコーナーに近づいている。のちになって慣れてしまえば、こんな「恐る恐る」はどこかにいってしまいうだろうが、それは未来の話だ。いまはもっぱら入園直後の不安が主人公だ。だから身も心も重いのである。

不慣れた環境を少しずつ解きほぐしてくれるのは既知のもの、周知のものが頼りになるわけである。「あ、ままごとの道具がある！」というのはその一例である。ただし、勝手に近づいてよいものか。このとき先生が「いいよ」と言ってくれた。そのことは、近づいていいという許可と同時に、許可してくれた「先生」とのかかわりが一歩ほぐれたことを示している。だから、次の「さわってもいいかな」という表情で先生の方を見ると、園

児は、肯定の答えを予想しているのである。

こんなわけで、この小さな場面は、皿やスプーンにさわって、並べ変えてみたり、ひとりごとを言ううちに——つまり物とのかかわりのうちに——環境を手慣れた形に組み替えているのである。物とのかかわりが、ほとんどの場合、人とのかかわりと同時的に生まれているということをおこそう。

### 役割の出現

園児が自分の役割を演ずるのは右の二つの「かかわり」がゆるやかに成立し、そのあとである高まりを見せるときである。自分が組み替えた環境を「見てくれ」と訴える。だれかに「見てくれ、こんなにできたから」と呼びかける。そういう条件が昂まったときである。いずれも「アップビル」だが、これは例のお店屋さんごっこの際の「さあ、いらっしゃい」と構造的には同じである。見かけはともかく、この表現には「われここにあり」という存在の告示と「何を商っているか」という展

示的な表現とが含まれている。

「ねえ、先生、見てよ！」

と呼びかける子どもは、ここで自分の「手がけたこと」を背景に立っている。そして、そのことばによって、教師から「声をかけてもらう」ことを期待し、ついで「目をかけてもらう」ことを期待している。

かくて「手をかけ」にはじまり、「声をかけ」を呼び込み、最終的には「目をかけ」てもらおう関係を期待している。以上の「手をかけ」以下の概念は、日常用語であるが、がっちりとした理論体系の礎石になりうるようである。

実存とか、存在とか、現存在とか、その他もろもろの術語も生き生きとした想像力で身辺にもってきてもみれば、右のような概念と重なってくる。

「ねえ、先生、こっちへ来て、見て！」という呼びかけに、先生が園児のところへ行き、まなざしを交わし、「ああ、よくできたねえ」と承認してやる。

右の小さな表現のなかにもテツガク的なガイネンが現

われている。

かりに、子どもがこしらえたものがいかに稚ないものであっても、だれもバカ正直に「何だこんなつまらないものをつくって」だの「わざわざ呼んだりして」などと応答が成立しないのが家庭というナマな実存の世界の特徴だが。

家庭の内部と異なって、幼稚園内は、あくまでもプロの教師がちゃんと責任をもっている。「責任」の厚意が「応答」だというものもこの辺の機微を示してくれている。

#### バカ正直リアリズム

したがって、バカ正直リアリズムの特徴も見えてくる。それは相手の立場を無視するという一点に特徴がある。狭く、しかもできあがった見方を変えようとはしない。悲しい立場である。「お店屋さんごっこ」の授業を見ても感動しない。ただ昔々として見ている。

遊びができないのだ。あわれ。

家庭の中ではこの苛々が許されるから、この点についてもふれておこう。少し横道にそれるようだが、このところをさけて通つたらもつたいない。

家庭の中で、子どもが何かを並べていたとする。「ねえ、見てよ！」と当然呼ばれる。

そのとき無条件に「あ、よくできたねえ」と愛想よく応じられる——とは限らない。

幼稚園の先生の家庭であっても——つまり幼稚園で他人さまの子どもを前にしているときはプロ意識で醒めているからいつもにこにこして応じている先生であつても、こと自分の家庭においては、そういうプロ意識、原理原則が通用しないのをちゃんと知っておられる。

だから、わが子が「ねえ、こんなものをつくったからぜひ見てよ！」と訴えに来たとしますな。その場合、プロ面に切り替えたり、営業用の面に切り替えることは時と場合によってはムリなのでありますよ。

そこで——

「うるさいわねえ。見りゃわかるでしょ。いま台所の仕

事で忙しいのだから」

と、声高に、語尾を上げて、トゲのある、ケンの含んだことばで応じることもおあり（いや、大あり）のはず。あ、つ、れ。

これをケンカランと一方的に断罪すべきでしょうか。

否、です。ここでケンカランと言う人は、たぶん子どもを育てることの「のっぴきならぬ」ことを身をもってジッセンしたことの無い見物人である。それこそバカ正直リアリズムであるぞ。

かくて、「のっぴきならぬ」ことをしかと見すえていると、子どもへの対応が一樣ではありえないこと、一筋縄ではいけないことが見えてくる。幸いにも、家の中では、たまさかに怒鳴ろうが、コミュニケーションのネットワークは何通りもあるので、致命的にはならない。（ただし、幼児と親の場合）

生一本

バカ正直リアリズムなどという品のよくないことばは

あまり使いたくないが、それを別のことばに代えると、生一本主義とか単一的思考とかガンコとか、いろいろと言ひ換えねばならない。そう試みると、急に平べったい（それこそ「バカ正直な」ことになってしまう）ことになりかねない。愚か正直、愚直、等、いろいろ試みているうち、それが意外にも愛嬌のある意味をもっていることなどもわかってくる。

お芝居で「バカ正直者」の役割を演ずる人はバカ正直者では不可能だ。

子ども——四歳児ですよ——が入園して一ヵ月目、お店屋さんごっこを演じた。

粘土でだんごをつくる。トマトをつくる。きうりをつくる。

開店！

「いらっしやい」「ぎゃあ、いらっしやい」

粘土でつくったお金をもって買いに行く園児たちのことば——

「〇〇ください」が圧倒的。

そのなかで驚かされた発言左のごとし。

「おつかいものですから」

「おつつみしますか」（しぐさがみごと）

「おつりはいりませんよ」（チップ？）

「見つくろて（見つくろっての意か）くださいな」

「ナダノキイッポン（灘の生一本）とどけてください」

ああ、「生一本」！。子どもは生一本に学んではない。「生一本」ということばを使えるほど、生一本ではないのである。

見立てる

「見つくろってください」には参った。こんなセリフをいったいどこで学んだのだろうか。

「見つくろろう」とは「見はからう」こと。品物などを適当に選んで整えることだ。そのイミを四歳児はわかっている。だが使ってみせた。このズレは、具体的な場面ではかめられる。売手が「見つくろろう」のイミを理解できなければどうにもならないからである。

「見つくろう」などという買い方は、元来は買い方が売る側にゲタをあずけることに近かった。買い手が「見つくろう」ことよりも、買い手が売る側を信用した上で生まれた表現だった。買い手が自分で見つくろって買うことは今日の方が主流である。主流になれば「見つくろって買う」という表現は少なくなるはずである。

園児たちがどのようなことばを用いようが、そこで展開している交換は、一つの重要な要件からできあがっている。それが失われたら「バカ正直リアリズム」に戻ってしまうのだ。その条件とは「あるものを別のものに見立てること」にほかならぬ。この点が共有されているから、粘土のお金はお金として通用し、粘土の「おだんご」は「だんご」と見なされているのである。

当然のことと言うなかれ。  
ゴザ一枚が「店」なのである。そして子どもである自分分は、「お客さん」に変身し、次の場面では「パン屋さん」に変身している。「パン屋さん」として、「お客さん」にパンを売っていたご当人が、次の瞬間には粘土のお金

をもち、「きょうはお休み」と書いた紙切れを「店」の前に立てて、すぐ横の文房具屋さんに買い物に出かけている。

どの「店」も、先生が客としてやってくることで活気を呈する。これは晴れの場。

### サービス業

われわれオトナは、「お店屋さんごっこ」といえばほとんど品物を売っている店だけを想像する。

ところが、われわれの予想に反し、最近では園児たちの「お店屋さんごっこ」に「サービス業」も登場する。

これは冷静に考えれば予想されないことではなかった。「魚屋さん」や「パン屋さん」と並び「本屋さん」や「文房具屋さん」が登場したとき、これらの「店」の業種の違いに気づいておけば予想もできたのである。

唐突に開店したのが「歯医者さん」である。椅子をニコ向かい合わせに並べ、スプーンと茶わん、それにコップを用意し、それを「見たてれ」ば歯科医院が出現す

る。あ、隠れていた。ストローが三本。ビールのふたが二コ、それに色紙で切り抜いた治療薬。

数日前、歯の検診が行われたのである。

それをおぼえていて早速応用したのである。

「どれ、どれ、アーンして」

「大したことないです」

「おだいじにね」

「はい、つぎ〇〇さーん」

これも一日やそこいらでおぼえられるセリフではなさそうである。歯を痛くして、これまでに何回も歯科医に通ったのであろう。そうでなくては「おだいじにね」などというセリフが吐けるものではない。

とも思ったが、たしかめようがない。一方では、こんなセリフ四歳児が容易に自分でつくり出せるものでもあのような気もする。テレビなどから学べるものなのだから。

「交歓」という観点から整理し直してみるとどうなるか。「魚屋さん」や「花屋さん」を演ずる子どもたちは、

「いらっしゃい」をあまり超えないでいる。ところが「サービス業」を演ずる段になると、この歯科医の場面でもそうだったが、語調、しぐさ、応答がいやにサービス的になるのである。お愛想を言い、愛嬌をよくし、お世辞も言うのである。

「痛くありませんからね」

「もうすぐですからね」

「じゃ、こんどは火曜日に来てください」

何というすばらしきドラマ。

#### 後日談

さて読者よ！

これらには後日談がある。こんなことを演じていた園児たちも、とっくにこれらを乗り越えてしまった。ご当人たちはこんな遊びをしたことなどをとっくに忘れてしまっている。成長のある段階の一コマとしてこれは幼稚園の教師の記録とその分析のうちに残っている。のみならず、その分析の成果はしだいに積みあげられ、理論的



にも高いところに到達している。

理論——ああ、頭が痛い、とお思いにならないでいた  
だきたい。理論は本来、私たちの日常の実践を見通せる  
力を与えてくれ、私たちを身軽にしてくれるものである  
はず。たあいもなれないと思われるようなことの中にも、発  
展のきっかけをつかめるようなエネルギーの調整をして  
くれるものであったはず。

一九八五年の十一月七日のことだった。三重県の津市  
にある市立藤水幼稚園で公開の研究発表会があった。全  
国から多くの人びとが集まってきた。

その当日、研究発表のまとめと、資料をいただき、本  
当に感銘を受けた。あれからもうかなりの時間がたって  
いる。

しかし、時折この研究集録を取り出して読み直してみ  
る。

その特徴は左のようなどころにある。

- 一、研究のねらいが明快に示されている。
- 二、園児の実態を継続して追っている。

三、どういう場面で、どういう関わりにおいて、どう  
発言したかを記録している。

『ごっこ姿を追って』と題する資料篇は何度読んでも  
新鮮である。

今回の「お店屋さんごっこ」は、この資料篇を読んで  
いるうちに生まれたアイデアである。

小学校の「お店屋さんごっこ」は古くからあった。筆  
者も小学校二年のとき、算数の授業のなかでそれをやっ  
た記憶がある。「ええ、いらっしやい」というような呼  
び声のネタを手に入れたのは落語からであった。最初口  
にするときは、遊びとはいえ勇気が必要だった。しか  
し、一回口になると、あとは簡単だった。

そういえば、理論だって、SFだって、「ごっこ」の  
要素をもっているようだ。

(名古屋大学)